岡山県俳人協会会報

烏城

第81号
令和3年12月発行
（2021年）

発行
岡山県俳人協会

事務局
〒700－0824
岡山市北区内山下
2－5－10　角南方
TEL　（086）223－7519
振替口座01380－0－102923
（年会費専用）

第四十二回 岡山県俳人協会 俳句大会開く

連日の季節はずれの夏日から秋冷に転じた10月17日（日）、岡山国際交流センターに於いて令和3年度岡山県俳人協会第42回俳句大会が開催された。

午前10時の受付開始から順調に来場者が到着し、最終的には96名が参加した。

当日はやや鎮静化の傾向にあったとは言え、依然新型コロナウイルス対策に万全を期すべしとの趣旨から、参加者全員の検温、随所への消毒液の配置、マスクの常時着用、適切な座席間隔、昼食時の黙食、等の措置が徹底された。

受付での円滑な入場手続を進める一方、別室では順次集まる当日句の清記と選句などの作業が行われた。

本大会の事前応募句は870句、当日句は82句となり、予定通り13時から左居正恵、小倉貴久江両名の司会により開催された。曽根薫風会長より、コロナ禍を押しての多数の参加へ謝意等を含む挨拶があり、講演へと進んだ。

講師として公益社団法人俳人協会幹事、「朱雀」主宰、「香雨」同人の田中春生先生をお迎えし、「客観写生の射程」と題してご講演をいただき、示唆に富む充実の一時間となった。併せて田中先生の選ばれた事前応募句につき講評をいただいた＝講演要旨別記＝

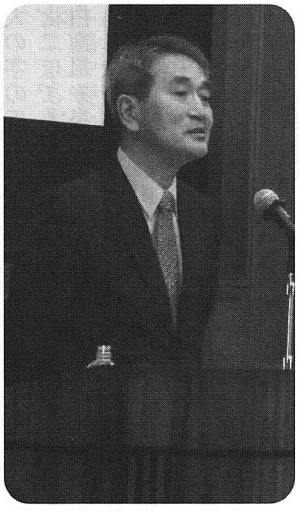
次いで司会者より後日の吟行句会等の事務連絡が行われ小憩に入った。

小憩の後、事前応募句の表彰と賞品授与が行われた。おかやま県民文化祭賞、岡山県知事賞、岡山市芸術祭実行委員長賞、岡山市長賞、山陽新聞社賞、RSK山陽放送賞、NHK岡山放送局長賞、秀逸賞、優秀賞が授与されたほか、新人奨励賞の二人には山本那実常任幹事の手による両者の句を墨書した色紙も併せて贈られた。

次いで当日句の表彰等に移った。田中先生と12名の特別選者の特選句の選評が行われ、入賞者全員に賞品が授与された。

コロナ禍の中、出席者、関係者全員の一丸となっての協力のもと、予定時刻を30分程前倒しして15時30分、景山薫副会長の閉会挨拶を以て盛会裡に令和3年度俳句大会が終了した。

（編集部）



田中春生先生

会場風景

応募句入賞作品

おかやま県民文化祭賞　佐藤　史男
白絣父を知らずに父に似て

岡山県知事賞　山県　章宏
紙ふうせん返す子の音母の音

岡山市芸術祭実行委員長賞　磨家　泉
折鶴は指が覚えて広島忌

岡山市長賞　角南　英二
陸上部秋夕焼へ一礼す

山陽新聞社賞　西村　泉
戦前をさまよふ父の日向ぼこ

RSK山陽放送賞　原田　慶子
沖波や一人のための卒業歌

NHK岡山放送局長賞　松尾　佳子
花鋏パチンと寒の明けにけり

秀逸賞

槍投げの静止一瞬天高し　十河　清
ホイと投げホイと受け取る西瓜畑　小林　美鈴
揚花火普段は見せぬ顔照らす　日江井　健
締めてゆく六角ボルト油照　大倉　白帆
蹴轆轤の土立ち上がる薄暑かな　三宅　章文
刀工の阿吽の呼吸火の涼し　吉原多佳子
鉛筆の芯をとがらせ梅雨籠り　小橋さち江
臍の緒の山羊立ち上がる花菜風　高木　幸子
大根掛け終へて猫背へ戻る夫　立石はるか
新涼や一駅だけの乗車券　広畑美千代

優秀賞

ふる里は水匂ふ町初燕　細羽　道子
マイナンバー付けし牧牛風薫る　大森　博子
葉桜に埋もれて村の診療所　高村　蔦青
闇の端焦がし手花火了りけり　乾　真紀子
大屋根へ遅れし一羽巣立ちけり　髙杉　浪子
大の字の二人に余す夏座敷　川池　紀夫
どこまでも柾目爽気の鉋がけ　山本　一穂
白南風や島にひとつの雑貨店　小林　克己
あした着る服を揃へて終戦日　林　佳子
帰省子と校歌の山へ登りけり　菱川　瑞枝
袖口のレースひらひら手話やさし　吉久　千鶴
田植機の泥のにほひとすれ違ふ　密田真理子
光り合ふ備前平野や田水張る　立石　直国

新人奨励賞

交番に貼り紙多しカンナ咲く　西江　友里
丸なすび一番星を映しけり　西浦　主真

田中春生先生特選句

あめんぼの水を掴みて乾きゐる　角南　英二
搾乳へ自づと並ぶ牛日永　島村　博子

入賞重複

満天の星の受け皿代田水　佐藤　史男
歯科の椅子椿の庭へ起き上がる　西村　泉
銀やんま絡み合ふ時紙の音　角南　英二
沈下橋渡る帰郷や合歓の花　磨家　泉

おかやま県民文化祭賞

籐椅子のきしみは父の独り言　松尾　佳子
鳥帰る蔵の小窓の片開き　松尾　佳子
逝く母の終の服選る朧の夜　角南　英二
冷まじや備前焼なる手榴弾　角南　英二
涼しさや千本格子磨き上げ　磨家　泉
一条の滝もて山をひきしむる　磨家　泉
身の幅といふ一途さや蜷の道　原田　慶子
三尺寝すべては覚めてからのこと　小林　美鈴
語りべの声に齢や夏館　磨家　泉
自転車の立ち漕ぎ受験合格子　原田　慶子

当日句入賞作品

大会大賞

動き出しさう黄昏の藁ぼつち　島村　博子

烏城賞

誕生の手形足形菊日和　佐藤　史男

支部長賞

秋天へ透かして選れりとんぼ玉　角南　英二

秀逸賞

晩年の母は筆談木の実ふる　大森　博子
速球のごと逝きし君星月夜　尾形　松子
かけつこの先頭が着く花野かな　難波　政子
夕月のかかりて撓む蜘蛛の網　景山　薫
釣糸に影の生まるる白露かな　大倉　白帆
銀杏の一切放下大地打つ　脇本　妙
風癖のままに活けるも秋の草　佐藤　恭子
栗強飯二つ山越え届きけり　大森　哲也
ライダーの一団茶屋へ茸汁　原田　慶子
一合の米研ぐくらし小鳥来る　古谷　静
蓮の実のつなぐ太古の記憶かな　赤木ふみを
帰る子の荷に一房のマスカット　目賀　紀子
いぼむしり祈る容にねむりけり　小川　三胡
するりと髪束ねる女医の爽気かな　細羽　道子

田中春生先生特選句

霧ぶすま開き借景の山の立つ　磨家　泉
秋燕の大空に干す濯ぎ物　中山　敏子
するりと髪束ねる女医の爽気かな　細羽　道子

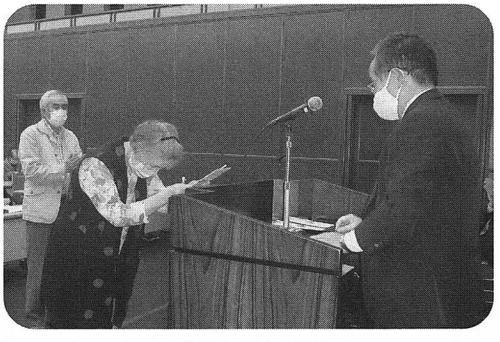
選者特選句

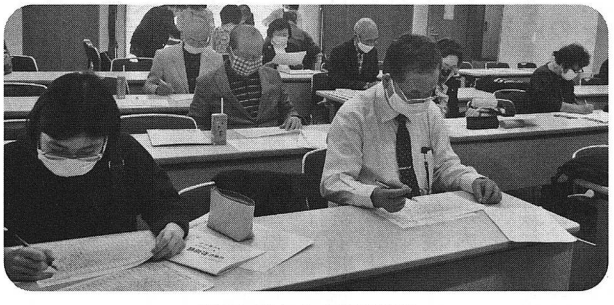
曽根　薫風特選
動き出しさう黄昏の藁ぼつち　島村　博子
景山　薫特選
蜻蛉群る吉備にひとつの古塔据ゑ　守安　愛子
赤木ふみを特選
漣の一閃尖る暮の秋　近常　倫子
大倉　白帆特選
動き出しさう黄昏の藁ぼつち　島村　博子
杉本征之進特選
銀杏の一切放下大地打つ　脇本　妙
密田真理子特選
動き出しさう黄昏の藁ぼつち　島村　博子
難波　政子特選
ライダーの一団茶屋へ茸汁　原田　慶子
松尾　佳子特選
秋天へ透かして選れりとんぼ玉　角南　英二
丸山　敏幸特選
秋天へ透かして選れりとんぼ玉　角南　英二
守安　愛子特選
阿蘇の夕唯しろがねの花すすき　近藤　春美
森脇　八重特選
誕生の手形足形菊日和　佐藤　史男
西江　友里特選
栗強飯二つ山越え届きけり　大森　哲也

新人奨励賞

選句中の田中先生

作品集作成作業


当日句大会大賞


当日句選句中の特別選者

田中春生先生講演
「客観写生の射程」

講師紹介

昭和二十八年、大阪市生まれ。二十代より「狩」主宰鷹羽狩行に師事。「狩」新人賞、同人賞受賞。同人会長。第一回朝日俳句新人賞受賞。

「朱雀」主宰。「香雨」同人。俳人協会幹事。句集に『シュプール』『直幹』『山花』

子の朝はいつもまつさら小鳥くる　春生

「昨年の講演計画がコロナ禍で中止となり、本年実現できたことを嬉しく思う、高校教師を定年退職後は俳句一筋」との自己紹介があった。

講演にあたり

奈良での俳句塾や「朱雀」での指導に、藤田湘子の『20週俳句入門』をよく使ってきた。今日は「写生」を中心にレジュメに添いすすめたい。

講演要旨

Ⅰ　見えていることだけを詠む

写生で魅かれた句。

かんじきを最も戸口近く吊る　森田　峠

何故この句に魅かれるかを分析してみた。

頭だけで考えず、雪国に住んでいる人の生活を見たまま詠んでいる。かんじきのささくれとか、黒ずむとか一切表現していない。「最も」が効果的。これ以上ない表現となっている。

浜の家でて踊子の急ぎけり　大星たかし
走りけり　添削　阿波野青畝

家見えてからは元気に一年生
一気に　添削　鷹羽狩行

踊子は急いでいるのか、一年生は元気か分からない。添削のように見たままを詠む。

ひつぱれる糸まつすぐや甲虫　高野素十

甲虫の力をまっすぐな糸で描写。

Ⅱ　写生

【写生】

スケートの両手ただよひつつ止まる　森賀まり

動きを見たままひたすらスケッチをしている。

【客観写生】

冬蜂の死にどころなく歩きけり　村上鬼城

小動物を詠むことで人間を詠み自分の思いを重ねる。人間本来のあり方と関連。

滝の上に水現はれて落ちにけり　後藤夜半

夏の季語であるが涼やかさなど季節感がない。

水の塊を詠むことで滝が眼前に拡がり迫る。

Ⅲ　『ホトトギス雑詠句評会抄』（小学館）

昭和初期の名句が紹介され、高浜虚子、水原秋櫻子、山口誓子等の論評も掲載されている。

山焼く火檜原に来ればまのあたり水原秋櫻子

火が目前に迫ってくるが、実景ではないと作者の記。心に深く残った事柄なら実景でなくてもよい。主観、客観の議論は幼稚であると虚子は言っている。美しい風景に合わせて詠むのは意外性に乏しい。

摘草の人また立ちて歩きけり　高野素十

一心に草を摘む人を詠み、その動きの中で土地の広がりも見えてくる。虚子はこの句を客観写生として評価した。

写生は単純なことを詠んで要を掴む。写生句の要点は勘所をぱっと掴むこと。

Ⅳ　焦点・描写・抽象

水ゆれて鳳凰堂へ蛇の首　阿波野青畝

この句の凄さは首という小さいものに焦点を絞り込んだところ。

蝌蚪一つ鼻杭にあて休みをり　星野立子

蝌蚪の小さな鼻をそこまで詠むかと思う独自性。

春夕べ襖に手かけ母来給ふ　石田波郷

「襖に手かけ」だけで形容詞はなく、どういう母か対象の気品が窺える。

秋の谷とうんと銃の谺かな　阿波野青畝

「とうん」の擬音がみごとである。大きな谷間の空間が見えてくる。

※鳥わたるこきこきこきと罐切れば　秋元不死男

「こきこきこき」の金属音が生活感、物質感を表現。そして空の広がり。抽象的な把握の中に近代俳句の諸相を感じる。

Ⅴ　季語の位置

※漂へる手袋のある運河かな　高野素十

季語がその句のどこにあるか。季語の本意は寒さから手を守ること。しかし、写生は技量が進むほど単純化。それに徹しているとこのような句ができる。

虚子が選ぶということは大変なことである。

写生は焦点を定めあっと思ったことを切り取り、在り来りでなく他の人が表現していない方法で詠む。景色を憶えることも大切と結ばれた。

定年まで高校生に数学を教えられ鍛えられた声量は、この日も爽やかに会場に響き渡った。

（磨家　泉）

句集紹介

安光穎耳『俳句の杜』2021 精選アンソロジー

重政　三潮

この夏の盛りの暑い日、穎耳さんからずっしりと重い『俳句の杜』が届いた。十六人の作家による、それぞれ百句のアンソロジーである。

着本直後、熱中症で入院されたとの報に接し、案じていたが、九月の句会には無事回復されて「夏負の物の怪我を蹂躙す」などの句を見せていただいた。本当に喜ばしい。

穎耳さんは、皆吉爽雨創刊の「雪解」によられ、師の提唱された「観照は静かで深く、表現はさりげなく、詩情は深く」を心に花鳥諷詠、客観写生を守り続ける、を守り通してこられ、難解な句は一句もない。

苑淑気人を畏れぬ鳩群れて

後楽園のお正月。人に馴れた鳩の群れにすがすがしい気分を感じられた。「行きずりの見知らぬ人と御慶かな」の句が続く。

孤老なほ医書枕頭に朝寝かな

コロナ禍中の「桜蕊見舞叶はぬ妻のゐて」を経て「つながれし管みな抜かれ妻涼し」と詠んで奥様を見送られた。痛切極りない。

一人になられても枕頭には医書。頼りになる先生。すこやかに朝寝をされて、更なるご活躍をお祈りする。

初蝶や丹頂を飼ふ檻の中

あたたかくなった後楽園の鶴の檻の前に立つ穎耳さんが見える。同じ羽持つものの鶴と蝶との挨拶が聞こえる。

勿忘草蕾多きを選び買ふ

この花は勿忘草と言う良い名をもらった。私も勿忘草と聞けば、コペンハーゲンの公園の池の周囲を埋め尽していた藍微塵を思う。蕾はすぐに花盛り。

終刊号師の秋の句を見開きに

「うまや」の終刊と見た。長くご縁を続けた俳誌の終刊に会うのは切ないことだ。主宰西垣青稲子の秋の句をもって終る。残念。

落選の菊に呟く菊師かな

菊花展に出掛けた。懸崖、人形、福助などそれぞれ賞の札が付けられ見る人をたのしませてくれた。惜しくも落選した菊師のぶつぶつ呟く声をそれとなく聞きとめた穎耳さん。「来年に向けて頑張れよ」。

終りに心に残った句を掲げて筆を措く。

広島忌過ぎ妻が逝き長崎忌
百日紅我にも残る未来あり
新調の靴よく適ひ年の暮
釘添へて丹波黒豆お歳暮に
町内の我は長老溝浚へ
わが余命五年はあらじ余花仰ぐ

俳句雑話⑤

句帳を開かぬ一日

景山　薫

九月某日、晴れていたので急に思い立ち小豆島に行くことにした。小豆島の観光名所を訪ねるのではなく、新岡山港から小豆島の土庄港までの一時間十分のフェリーの旅が目的。広々とした船室とゆったりとした座席はあるが、コーヒーを買って三階のデッキへ。潮風に身をまかす。児島湾を出るまでは対岸の景色をながめる。犬島の大きなレンガの煙突を過ぎれば、あとは秋の日を銀色に変えた波の綺羅を広げた瀬戸の海と青い島々。何も考えない至福の時間。コーヒーを飲みながらただぼうーと空と島と海の青を楽しむのみ。

そうこうする内にフェリーの右手にあの独特の屋島の島影が見えてくる。五剣山の影も。一時間十分の船旅ももう終り。いくらフェリーに乗るのが目的とは言え、すぐ引き返すのも無粋というもの。

小豆島と言えばオリーブ。路線バスに三十分ほど揺られ、オリーブ公園へ。光る海を眼下に従え、緑の実をたわわにつけたオリーブが丘一面を覆い尽している。取りあえずギリシャの風車やオリーブの原木を見てレストランへ。小豆島そうめんとおにぎりのランチを注文。食後丘を下りてオリーブビーチへ。湾には赤いウインドサーフィンが一つ。銀波浦というバス停から土庄港に戻れば、白いフェリーが出港を待っていた。もちろん帰路も潮風のデッキで過す。句帳はバッグの中にあったが一度も開かなかった。たまにはこんな日もあってもいいと思う。

第十五集合同句集鑑賞　3

吟行を楽しむ

守安　愛子

新緑へ扉を開く五重塔　　小野　純子

五重塔は県内唯一のもので一八二一年（文政四年）から二十五年かけて建立されたといわれています。抜身の太刀のような鋭さをもつ五重塔は見事なたたずまいです。久し振りのご開帳でゆっくりと扉が開かれ新緑の風を一気にすい込みます。五重塔の天辺まで届いたことでしょう。美しい新緑の中待ちに待ったご開帳の様子が伺える一句です。実はこの備中国分寺はわが家の菩提寺なので一層親近感をいだきました。秋の国分寺も素敵です。

講堂の床映渡る楷紅葉　　小林　志帆

閑谷学校は江戸時代に岡山藩主池田光政が庶民教育の場としてつくったものです。講堂は国宝。周りを囲む石垣、聖廟などほとんどの建造物は重要文化財となっています。

聖廟の前にある楷の木の大木は燃え立つ様な色の紅葉となります。磨きあげられたこの広い床に映える美しい紅葉を胸に多くの若者が希望に満ちて巣立って行ったことでしょう。

どちらも吟行句です。自然の風物には新鮮な美しさと驚きがあります。それを発見する楽しさは写生眼をやしなうことになるのです。これからも吟行を楽しんでください。

見て感じて詠む

小林　克己

ひだまりに妣の面かげ冬わらび　　髙杉　浪子

冬蕨は、多年生シダ類の一種フユノハナワラビで、夏は枯れ、十一月から三月に胞子葉の枝に球状の胞子嚢をつけます。春の蕨とは別物。

亡くなられたお母さまとの思い出は多々あると思いますが、冬のひだまりの中に見たお母さまの面影はどんなものだったのでしょうか。想像は膨らみますが、きっと優しくて、暖かい人だったのではないかと、この上五からも感じ取れます。また、冬わらびとの取り合わせも絶妙で、素朴で質素な人柄を季語が語ってくれています。

ほほゑみは老いの化粧や更衣　　近藤　京子

老いても化粧は女性にとっては大事な身だしなみのひとつである。鏡を見つめるとそこにはこれまでの人生が刻まれた顔がこちらを見ている。紅やファンデーションも確かに綺麗になるが、笑顔は化粧以上に女性をきれいにしてくれる。朝、鏡に向かって微笑んでいる作者が目に浮かんできます。また、季語の更衣がよく効いていて、前向きな気持ちがこの句の中から読み取れます。女性に限らず、男性も微笑みの化粧を纏いたいものです。

「見て感じたことを素直に詠む」ことで、自分詩としての俳句を楽しみましょう。

第24回俳句甲子園全国大会

ウミユリの化石洗ひぬ山清水　辻　颯太郎

8月22日（日）、俳句甲子園全国大会が愛媛県松山市で行われました。コロナ禍のため、今年は、地方大会にエントリーした116チームの中から、投句審査で選ばれた32チームが全国大会に進みました。しかし全チームが松山に集まることは叶わず、上位4チームだけが松山市に集まり、準決勝と決勝戦に臨み、開成高等学校が優勝を飾りました。

岡山県からは岡山朝日高校が全国大会に進みました。全国大会出場者の作品全640句の中から、辻颯太郎君（岡山朝日2年）の句が大会最優秀句（文部科学大臣賞）に輝きました。　（田中立花）

個人賞発表の最後に私の句が読まれた時は、驚きで椅子から2㎝ほど飛び上がりました。俳句甲子園は全国の高校生の渾身の句が集まり、ぶつかり合う場です。日本独自の文学である俳句を高校生が本気になって取り組む、私達にとってとても大切な場所です。高校生ならではの句を詠み、また読むことができるのは幸運なことです。自分の感性にぴったりの句もあれば、すぐには理解できない句もありますが、私たちは俳句という大きな流れの中で他者とめぐりあい、深い対話を行っているのだと、この大会を通して感じました。　（辻　颯太郎）

秋の吟行句会

―初冬の岡山城・後楽園―

令和3年11月14日（日）、コロナ禍のため3回も中止の憂き目をみた吟行句会が漸く実現した。会場は、密を避けるため、広い岡山県立図書館多目的ホールを借りたため、吟行地は、岡山城、後楽園一帯とかなり広範囲となった。

当日は、「冬麗」という語にぴったりの晴天に恵まれた。菊花展最終日の紅葉の後楽園を巡る人、七五三で賑わう岡山神社から旭川河畔をそぞろ歩く人など、手帳を手にし、マスクの上の親しげな目差で句友であることが、何となくわかるのが不思議である。

例年と違う景色は、この一帯にいつも燦然と聳えている岡山城の姿が無く、大改修工事のため、すっぽりとうす墨色のシートに覆われていることである。何層かの直方体の積み重ねとなり頂きの正四角形から金の鯱が角のごとく冬空に輝いているのが、天守の存在を誇示している。工事用シートには、藩主の家紋が描かれていることを後に知った。修復完了の来秋、その偉容が戻ってくるのが待ち遠しく楽しみである。

投句締切は11時30分、句会場入口では、検温と手の消毒抜かりなく、密を避け、3人掛けの机の両端に腰掛ける。参加者42名、投句数126句、互選3句、特別選者は5句選中特選1句と、かなりの厳選である。

午後1時より、左居正恵吟行担当の司会で句会開始。曽根薫風会長の開会挨拶に続き、スムースに会は進行し、赤木ふみを顧問の閉会の挨拶、再会を約して午後3時前閉会となった。

同じ場所を歩き、それぞれ違った発見、感動があることが、吟行句会の醍醐味であると思う。

（脇本　妙）

特別選者特選句

曽根薫風特選

花弁に疲れの見えし賞の菊　杉本征之進

難波政子特選

改修のシートに家紋城小春　平田千惠子

杉本征之進特選

胸高に菰を巻かるる女松　景山　薫

磨家　泉特選

改修のシートに家紋城小春　平田千惠子

涼野海音特選

菰巻きの菰にも上下ありにけり　杉本征之進

互選高点句

改修のシートに家紋城小春　平田千惠子

胸高に菰を巻かるる女松　景山　薫

百閒の猫のいさうな路地小春　磨家　泉

花弁に疲れの見えし賞の菊　杉本征之進

水影をくずして鰡の飛びにけり　小川　俊子

冬蝶の翅やすめをり野面積　田中　立花

菰巻きの菰にも上下ありにけり　杉本征之進

露地奥や柊の香に刺のなく　佐藤　史男

城壁の標す災禍や小春風　高杉　浪子

一筋の冬日にしるき鶴の墓　曽根　薫風

小鳥来るメトロノームに似たる詩碑　脇本　妙

道楽とはにかむ菊師県知事賞　岡本三惠子

つくろはぬままに平伏し枯蓮　松尾　佳子

こつぽりの鈴音かろき七五三　小川　俊子

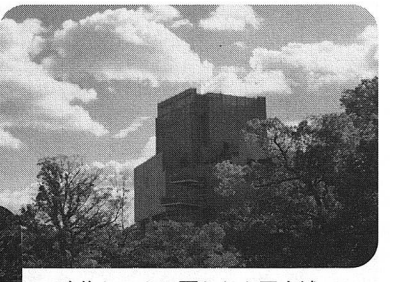
城垣の罅一筋冬来る　中山　敏子

搦手へ大曲りして冬の川　角南　英二

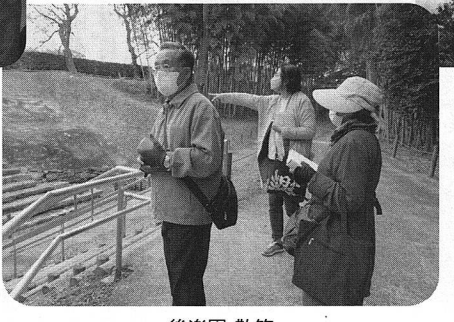
冬鵙や姿を隠す城の黙　赤木ふみを

鉢よりも大き一輪菊花展　高木　幸子

特別選者特選句表彰



改修シートに覆われた岡山城



後楽園 散策

会員の活躍

◇涼野　海音
「NHK」学園武蔵野市俳句大会大賞
木犀の喪服の肩に匂ひけり
「俳壇」8月号
特別企画　詠めば爽快～最涼の季語
衣　サングラス外す空港行きのバス
食　研修の始まる朝のトマトかな
住　アメリカの地図を開いて端居かな

◇柴田　奈美
2020年度　西東三鬼賞　佳作
目の合へばすぐ目をそらす金魚かな
第24回夢二俳句大賞 木暮陶四郎選　佳作
デッサンの線のやはらか夢二の忌
公益社団法人俳人協会主催
第60回全国俳句大会　三村純也入選
職歴の欄の足らざる啄木忌

新会員紹介

（「烏城」第80号以降）

大橋　淳子（遥照）
白き月ひんがしに透く冬の朝
森本田恵子（南風）
戦跡に涙ぽろぽろ汗冷ゆる
深谷　直子
静かさや木の芽微笑む朝の道
児玉　慎二
食卓の一輪挿しに曼珠沙華
井本　陽子（栴檀）
葉桜や新築ビルの百の玻璃
植野　太（三窄　満）（岡山馬酔木）
母逝つて父夏籠で孫のこゑ
佐藤　恭子（あくら）
風癖のままに活けるも秋の草
古寺　潔（雪解）
獺祭忌独り吟行蔵の町

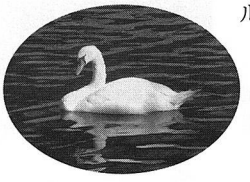
今後の主な行事予定

令和4年度総会
令和4年3月13日（日）
岡山県立図書館多目的ホール

第16集合同句集発行
3月13日（日）総会当日配布

春季吟行句会
4月9日（土）　岡山城・後楽園周辺
岡山県立図書館多目的ホール

第43回俳句大会
10月16日（日）
岡山国際交流センター


岡山城お堀の白鳥

原稿募集

会員の活躍、句会紹介、句集紹介、エッセイなど原稿を募集します。
なお、編集の都合上、採否や原稿の一部手直しはご了承下さい。
（編集部）

編集後記

写真　大倉祥男　大津千代子

コロナの先行きがまだ不透明な昨今ですが、なんとか「烏城」をお届けできました。担当者一同ほっとしております。来年こそは穏やかな年になりますように。
（石見邦慧）

コロナの今の状況から、小春日和という言葉が浮かびます。うれしいけれど本当の春ではない、ような。句会や吟行が普通にできる日が早く来ますように。（内田ひわ）

ワクチン接種のおかげでコロナが沈静化し、俳句大会が無事に開催され、皆様方にお会いすることが出来、嬉しく思います。
（岡本三恵子）

11月19日の「部分日食は」、近所の人たちと一緒に神秘的な月の変化を楽しんだ。月食の後の満月も大変に美しく、コロナ禍を一時忘れることができた。（原田慶子）

コロナ感染症の拡大で中止になっていた俳句大会、吟行句会が2年ぶりに開かれました。今回の「烏城」では俳句大会を中心に、吟行句会、若い方々の活躍、またベテランの方々の素晴らしい句集鑑賞などをお届けいたします。来年は笑顔で皆さまとお会いできますよう願っています。（広畑美千代）